

主題「平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒」の育成

1 主題設定の理由

社会科は「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することを最上位の目標としている。平和で民主的とは、争いがなく穏やかな状況を望み、一人一人のもつ権利が尊重されていることであり、このような「平和で民主的な考え」を基に生徒自らが課題を設定し、社会科の学習に責任をもって取り組むことで、平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の育成につながると考える。

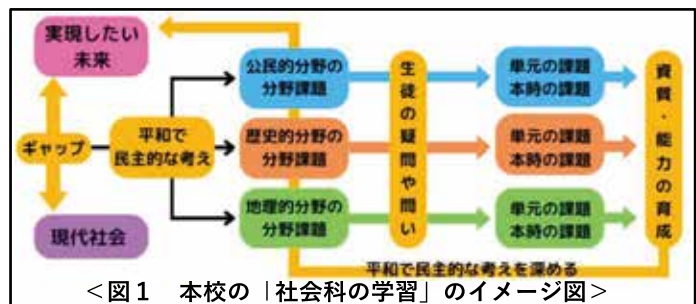
「平和で民主的な考え」を深めるためには、どうすれば争いはなくなるか、一人一人の権利を尊重するためには、などの答えのない課題を探究することが必要だと考える。学習指導要領解説(2019)には、課題を追究したり解決したりする活動について「生徒が社会的事象等から学習課題を見だし、課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果をまとめ、自分の学びを振り返ったり新たな問いを見いだしたりする方向で充実を図っていくことが大切である」とある。生徒が思い描く実現したい未来(よりよい社会と幸福な人生)と社会科の学習とのつながりを意識することで、解決したいと思える課題を設定することができる。生徒は課題解決のためにエージェンシーを発揮して、社会的事象を多面的・多角的に考察したり、多様な他者と協働して根拠を取捨選択したりすることを通して、資質・能力を身に付けるとともに、明確な答えのない「平和で民主的な考え」について考えを広げ深めることができるだろう。社会科の学習で身に付けた資質・能力と、探究的な学びの中で深まった「平和で民主的な考え」を基に、生徒は実現したい未来を切り拓いていくことができるだろう。

以上のことから、今年度は探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して、「平和で民主的な考えから、実現したい未来を切り拓く生徒」の育成を目指して研究を進める。

2 探究的な学びを実現するための具体的な手立て

(1) 「平和で民主的な考え」を基に自ら課題設定するための「分野課題」

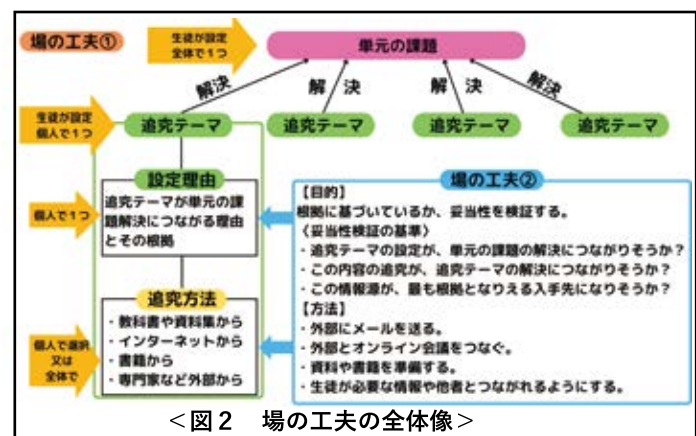
社会科における単元や一単位時間の課題は、生徒が実現したい未来と社会科の学習とのつながりを明確に意識でき、「責任をもって挑戦したい」と思えるものになりたい。本研究では、実現したい未来と現代社会とのギャップから(図1)、「平和で民主的な考え」を念頭に探究するための「分野課題」を生徒の考えを基に設定する。分野課題は、例えば地理的分野では、「グローバル化が進む世界における日本の在り方・私の生き方は?」、歴史的分野では「これからの為政者の在り方とは?」のように、生徒が常に念頭に置いて各分野の学習に取り組む。生徒は単元や授業の導入から生まれた疑問や問いと、実現したい未来へとつながる分野課題とを関連付けることで、生徒が「平和で民主的な考え」を基に、エージェンシーを発揮して探究できる課題を設定できるだろう。



<図1 本校の「社会科の学習」のイメージ図>

(2) 批判的思考を磨くための「場の工夫」

単元の課題を追究する過程では、生徒は単元の課題解決につながる追究テーマを設定して学習に取り組む。この時間のために、教師は外部とつながる手段を準備したり追究に必要な資料を準備



<図2 場の工夫の全体像>

したりして、生徒が自分のニーズに応じる多様な他者（友達、教師、外部人材など）から、自分が必要とする情報や追究の方法を知り、概念的知識を獲得できる場を整える（場の工夫①）。

追究テーマやその設定理由、追究方法は、課題の解決に寄与する妥当なものでなければならない。そこで、根拠や追究方法の妥当性を検証する場を設ける（場の工夫②）。その中で、追究テーマの設定理由に根拠があるか、調べた情報は信頼性の高いものか、テーマ解決のための妥当な他者か、などについて教師が具体的な基準を示し妥当性を検証できるようにする。

以上のような場の工夫①②を通して、生徒の批判的思考が磨かれ、単元の課題の解決（と、それを通じた分野課題の解決）のために多面的・多角的に考察することで、「平和で民主的な考え」を深めることができるだろう。また、外部人材から社会や現実の厳しさも含めた評価をいただくことで、より社会とのつながりを意識してエージェンシーを発揮し、AAR サイクルを回しながら困難や失敗も乗り越えていく力を育成できると考える。

3 授業実践例

(1) 単元 北海道地方

(2) 実施時期／学年／配当時間 令和6年3月／第2学年／全7時間

(3) 単元の目標

北海道地方の地域的特色や地域の課題、自然環境に関する特色ある事象と、関連する人々の生活や産業、そこで生ずる課題を理解するとともに、北海道地方の地域的特色を、自然環境を中核とした考察の仕方を基に多面的・多角的に考察したり、その過程や結果を適切に表現したりすることができる。

(4) 実践の概要

第1時では、分野課題「グローバル化が進む世界における日本のあり方・私の生き方とは？」と、生徒がもつ北海道の知識、教師の提示した北海道の画像や映像などから生まれた疑問を基に、生徒の言葉で「なぜ北海道は、魅力度ランキング1位なのか？」という単元の課題を設定した。その後、個人の興味・関心や疑問から単元の課題解決のための追究テーマを設定し、どのように情報収集を行うかの見通しをもった（図3）。

私は、北海道といえば夕張メロンをイメージする。このような有名なブランド商品があることが、北海道の魅力の高さなのではないだろうか？

【追究テーマ】
なぜ、夕張メロンは、北海道のブランド品になれたのか。

ブランド品になれたのには、人々の想いが背景にあるのではないか。地元の人々の話を聞いてみたい！

<図3 追究テーマの設定例と見通し>

第4時では、「場の工夫②」により、生徒が追究テーマと追究内容、追究方法について妥当性を検証した（図4）。自分とは異なる視点をもつ人からのアドバイスや、北海道で暮らす人々へのインタビューを通して得られた生の声を取り入れることで、多面的・多角的な視点が得られ、今後の見通しをもちながら探究活動を行えた。

寒さに負けない品種改良など、農家の人々の努力によって夕張メロンは北海道のブランド品となったと考えた。

夕張市役所へのインタビュー

職員

別の追究テーマの人との交流

生徒B

生産者の努力だけではない。色々な人の関わりで夕張メロンができています。互いがwinwinな関係を生み出したい。

北海道の自然を求めて観光客が来ていると考えた。北海道の特産物も観光客の消費によって成り立っているのでは。

私は生産者に有利な方がいいと考えていたが、どんなにいいものも、価値を見出す人がいなければいけない。消費者の視点でも考える必要があると思う。

生徒A

<図4 「場の工夫」による妥当性の検証>

第6時、第7時では、単元の課題に対する考えをまとめて発表した。追究テーマが異なる他者と議論することを通して、納得や共感をしたプレゼンテーションの共通点は何かを考え、単元の課題に対する概念を獲得した。自ら設定した追究テーマや内容、情報収集の方法などが、単元の課題を解決するために妥当であったのかを振り返ることで、生徒はどのような課題やテーマで追究を行うべきかについて考えを深めた。また、地理分野課題である「グローバル化が進む世界における日本のあり方・私の生き方とは？」についても、これまでの社会科の学習で深めた「平和で民主的な考え」

世界の出来事を「自分事」として考え、「自分の意見や考えをもつ」ことが大切だと考えた。以前、イギリスのEU離脱について議論をしたが、どちらも立場は違えど「自分事」として意見を述べていた。今回も、様々な立場の人々が地域の課題を「自分事」として考え、行動していた。グローバル化が進む中で、これからの日本は他の地域の課題や地球的課題を「日本は大丈夫」ととらえるのではなく、「自分事」として考えることが大切。よりよい日本をつくるために、自分に何ができるかはまだ明確ではないけれど、これからの学びを「自分事」として考えて、自分に何ができるかを探究していきたい。

生徒A

<図5 「分野課題」についての考え>

や、獲得してきた知識、概念を活用して、生徒自身の言葉で自身の考えをまとめ、実現したい未来を切り拓くために何が必要かについて考えを深めた。(図5)。

4 研究の成果と課題

成果として、生徒が「平和で民主的な考え」を常に考えながら、追究テーマを基に責任をもって学習に取り組むことができた。生徒の振り返りからは、「住みづらい場所だが、人々の努力や協力によって、この地域ならではの魅力を生み出すことができたのだと思った。」「技術の進歩だけでなく、それを支える地域や人々の温かさに気付いた。探究で触れた人々の思いをこれからの生活に生かしていくべきだろう。」という記載があり、この単元で得た概念的知識と「平和で民主的な考え」とのつながりを意識した記述は全体の75%に見られた。「分野課題」を基に課題設定することに対する意識調査では、「『平和で民主的な考え』について考えを深めることができた」に対して「深められた」「やや深められた」と回答した生徒が約80%であった。実現したい未来と現代社会とのギャップから設定した「分野課題」を基に学習を進めることで、生徒はエージェンシーを発揮して探究的な学びを実現し、社会的事象を多面的・多角的に考察する中で「平和で民主的な考え」を深めることができたと考える。また、「場の工夫」についての意識調査では、「効果的だった」「やや効果的だった」と回答した生徒が3月では88.2%、6月では91.1%であった。「場の工夫」を通して自身の追究内容や方法を振り返ることで、その後の追究の見通しをもち、自らAARサイクルを回して学習方法を自己調整しながら多面的・多角的に考察することができたと考える。以上のことから、「分野課題」を基に課題設定することや、「場の工夫」での追究を通して、「平和で民主的な考え」を深めることにつながり、未来を切り拓く生徒の育成につながったと考える。

課題として、課題設定が「平和で民主的な考え」を深められなかったと答えた生徒が約20%いることが挙げられる。これは、自身の学習と「平和で民主的な考え」とのつながりを十分意識できていなかったり、分野課題や課題設定が「平和で民主的な考え」を深めていることを実感できていなかったりすることが要因として考えられる。

5 今後の展望

生徒が答えのない「平和で民主的な考え」により考えを深めていくためには、単元の課題と分野課題との関連をより明らかにしながら学習を進める必要があると考える。また、多面的・多角的に考えを深めていくためには、自身の追究活動から新たな疑問や課題を見いだしたり、より多様な他者からの情報収集をしたりしていく必要があると考える。生徒が「平和で民主的な考え」を深めていくことで、自分の生き方や実現したい未来の姿がより明確になる。そうすることで、生徒は現在を実現したい未来に近付けるためにはどうすればよいかと常に問い続け、実現したい未来を切り拓くために学び続けることができると考える。

<参考文献>

- 梶谷 真司 (2023) 『問うとはどういうことか～人間的に生きるための思考のレッスン』 大和書房
- 唐木 清志 (2023) 『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』 東洋館出版社
- 京都教育大学附属桃山小学校『令和5年度 研究紀要』
- 群馬県教育委員会 (2019) 『はばたく群馬の指導プランⅡ』
- 群馬県教育委員会 (2019) 『はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用 Version』
- 奈須 正裕 (2022) 「学びのパラダイムシフト」『内外教育』
- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領解説 社会編』 東洋館出版社
- 若松 俊介 (2020) 『教師のいない授業の作り方』 明治図書出版

